

---

# 表の裏に。

神の息

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

表の裏に。

### 【Nコード】

N7300D

### 【作者名】

神の息

### 【あらすじ】

子供の無邪気で明るい心無くし、冷めた心しか持っていない中学男子と、心の中で思っている事を表情に出せない、無口無表情な中学女子の、青春系小説。

## 一話：表 裏（前書き）

主人公が二人で、二人の目線から書いているので、読みにくいと思います。

## 一話：表裏

ウチムラ  
内村

シンジロウ  
心次郎

男

中学2年生

一日一日が淡々と過ぎていく。思い出に残るような事も起きず、ただ平凡なだけの日々を歩いていく。

いつも皆は少し何か起これば、笑ったり、泣いたり、怒ったり。俺にはそんな子供っぽい「表現」はできない。俺は冷めた心しか持っていない。いつも皆に合わせて、楽しくも無いのに笑ったり、悲しくも無いのに泣いたり、ムカついても無いのに怒ったり。

それと共に、思っている事を表に出さなかったりしている。いつもガマンしている。

だから、人とはあまり話さない。顔を合わすことさえも避けている。本当の「気持ち」なんて伝わるわけが無い。

どうせ伝えられたとしても、半分ぐらいだろう。

いつも俺はパソコンの中で「気持ち」を伝えようとしている。チャットとか掲示板で見えない誰かと話している。その方が顔も合わさなくてもいいし、ガマンする必要も無くなるから。

今日は自分と同じ年齢の人と話そうとしている。「こんにちは」の挨拶は済ませた。

さあ 何を話そうかな。

一話：表 裏（後書き）

一話ずつが短いので、読みやすい人は読みやすいかと思います。

## 二話：表裏

ホウジョウ ユタカ  
北条 豊

女

中学2年生

ふと時計を見ると、いつの間にか今日が終わっていた。

こんな風に

つも一日は過ぎていった。

私は今、不登校なのだ。

なぜこうなったかというのは、そんなに長い話にはならない。

私は人と話すのが苦手なんです。べつに話題が無いとか、そういう事ではない。

普通の人並みの事をしゃべり、普通の女の子と同じ様な事を考えている。

ただ一つだけ。たった一つだけ。

私にはできない事がある。

「表情」

いつの日からか、私は笑うことや、泣くこと、怒ることが出来なくなっていた。

心の中では楽しい時も、悲しいときも、ム力つくことだってある。  
なぜだ

ろうか、顔には出せない。

そして今、学校に行かずに、家でパソコンで話ている。

これならこの不器用な顔を見られないで済む。

いま、一人の人と話そうとしている。

人はどんな人なんだろう。

この

## 二話：表 裏（後書き）

改行が多いですが、その辺はスルーをお願いします。

### 三話：君 僕

内村 心次朗

「学校ではどんな事をしてるんだ？（休憩時間とか）」

俺は話をひろげるために適当に話題を持ち込んだ。返事は

「学校には行ってない」

ということだった。正直びっくりした。俺は続けて話した。

「親は心配しないのか？」

と尋ねた。そりゃどんな親だって子供が不登校なのにはつとく様な奴はいないだろう。ゆっくりと返事がきた。

「親はいない」

さすがにこの時はまずい事をきいたな。と思った。でも俺はそれよりも気になっていた事があつた。

こいつと話し始めたときから。

こいつは 俺と 同じ様な事を 抱えて 生きている

顔なんか見なくても、それは感じられた。不意に俺は口走つた。

「俺は心の冷えきつた男だ。どんな事があつてもあまり具体的にとらえられない。でも、それでも、表情は無理やりつくつてる。お前もきつとそんな部分があるんだろう？だから人が怖いんだろう？」

なぜか俺は話していた。長い間返事は返ってこなかった。流石にいきなりすぎただろうか。

でも俺には分かった。君は今、涙を流してるんだろう。

「私はあなたとは違うけど同じ。」

どういう意味か分からなかった。続けて、

「私は心で思つたことを表情に出せないんです。」

ときた。俺はなんだか、ちょっとだけ嬉しかった。俺はまた口走つた。

「お前が笑えないのなら。お前が泣けないのなら。お前が怒れない



のなら。」

「無理でもいいから約束する」

「俺がお前に」

「きっといつか」

「『笑顔』をあげる。」

### 三話・君 僕（後書き）

読んで下さいまして本当にありがとうございます。  
マジでありがとつございます。  
いや、マジで。

## 四話：表く裏

北条 豊

「学校ではどんな事をしてるんだ？（休憩時間とか）」

学校なんて何年間いつてないだろうか。すぐに返事をした。

「学校には行つてない」

きつと少し程驚いてるんだろうな。とか思った。

「親は心配しないのか？」

どんどんと質問をしてくる人だなあ。でも残念だけど、私には親なんていないよ。自己紹介では言つてなかったけど、

私は親を幼い頃になくしてる。ちよつと返事をするのに戸惑つた。

「親はいない」

流石に話しくくしちやつたかな。と思つた。だけど私はそんな事より気にかかつている事があつた。

この人と話し始めたときから。この人は 私と 同じ様な

重荷を 背負つて 生きてる

目の前にいなくなつたつて、それは遠くから伝わってきた。

「俺は心の冷えきつた男だ。どんな事があつてもあまり具体的にとらえられない。でも、それでも、表情は無理やりつくつて

る。お前もきつとそんな部分があるんだろう？だから人が怖いんだろつ？」

いきなりだつた。びっくりした。それと、すごく嬉しくなつた。

いつの間にか私の瞳からは、

涙が流れていた。 変わらない表情をする顔の頬をつたつ

ていった。 変な気持ちで返事をした。

「私はあなたとは違うけど同じ。」

いそいでうつたから、説明不足かなあ と思つて急いで続けた。

「私は心で思つたことを表情に出せないんです。」

私は正直に話した。初めてこのことを人に話した。

あなたは私の心にこたえるように返事をくれた。

「お前が笑えないのなら。お前が泣けないのなら。お前が怒れないのなら。」

「無理でもいいから約束する」

「俺がお前に」

「きつといつか」

「『笑顔』をあげる。」

#### 四話：表く裏（後書き）

読んでくれて、ありがちよんまげ！！  
・・・面白くないですね、すいません。  
ぜひ感想お願いします！！

## 五話：君＋僕

内村 心次郎

結局その後は話が弾まずに解散となった。 就眠。

午前七時、俺はむっくりとベッドから出た。 俺には高校2年生になる姉貴がいる。 名前は華子。<sup>ハナコ</sup>

俺と華子は別々の部屋が家の二階にあるわけだが、華子はなかなか自分で起きられないから、俺が起こしに行く。

「うーい、起きろー。朝だぞー。起きねーと目の周辺にいつもより辛めのワサビぬんぞー。」

「ん、ああー、ううー。」

なかなか起きやしない。 しょうがないから顔をはたいて起こす。

「いい加減起きねーと俺まで遅刻すんだよー。」

「うあー、もうちょいだけえー寝かせてー。」

しょうもないやり取りをしてると母さんが部屋に入ってきた。

「まあ！！なんてことしてるの！！いくら華子がかわいいからって、手えだしちゃだめよっ！」

「も、いいからさっさと母さんは朝飯用意しとけよ。」

「はいはい」

母さんはそういうと一階へ降りていった。 するといきなりガバツと華子站了起来。

「今何時！！ヤバイヤバイ！！遅刻するうーー。」  
そう言いながら一階へ降りていった。

その後俺は学校に行く用意をして、荷物を持ち、家を出た。

やたらと友達としゃべりながら学校に向かっていく奴らが今日も早足で俺の隣を追い抜かしていく。

芸人の話とかしながら楽しそうに笑っている。 あんな芸の何が面

白いのだろうか。

そんなしょうもない会話で笑えるあんたらが恐ろしい。

「あらウツチー。今日も寂しく一人でご登校ですか。」

「ああそうだ。後、ウツチーはやめろ。」

話しかけてきたのは同じクラスの仲のいい女子、紺野緋伊奈。コンノヒイナ メ

ガネをかけている普通の女子。

「そういう緋伊奈も一人だろが。」

「まあねー。そういえば今日はお弁当持ってきてないんだった。

ちよつとジロー、コンビ二ついてきてよ。」

「別にいいが、ジローもやめろ。」

というわけで通学路の途中にあるコンビ二に寄ることに。

「どのパンがおいしいかなあー。」

と緋伊奈はパンをじろじろと見ている。 緋伊奈の隣にもう一人、

うちの学校の制服を着た女子がいた。

髪は短いショートヘアーで、肌は色白くて、世間でいう所の美人さ  
んだ。しかしこんな奴見たことが無い。

「おい、緋伊奈。」

「なによ。」

「あそこに居る女子、知ってるか？」

「知らないわよ。誰かしら？」

なんてことを話していると、学校のチャイムが聴こえた。 すると

その女子はいそいそとパンを買い、学校へ走っていった。

たつたと駆けていくその後姿を見たとき、なにかを感じた。

昨日と同じ感じの。 あの優しい温もりを。

「ちよつと！なにボートと突っ立ってんのよ。急ぐわよ！」

そついうと緋伊奈は学校に向かっていった。 Let's 遅刻。

遅刻して怒られた後、朝のホームルームがあつた。 まあいつも話

は聞いてないのだが。

俺の席は窓際のほうの、後ろの方の席。 先生の話聞いたとたん、

妙に皆、ざわつきはじめた。

どうせ、スゴロク大会がありますとかそんな話で盛り上がってるんだろ。

と思いつつも先生の話に耳をたてた。

「今日是不登校だった生徒が来ています。みんな知らないと思うけど、仲良くしてあげてください。」

だということらしい。まさか昨日の……。なんて漫画みたいな話あるわけないか。

また俺は横を向き、話を聞くのをやめた。

「ガラガラ」

と扉の開く音がする。その時また俺は何かを感じた。朝と同じ・・。

ふと前を見ると、今朝に見た美人さんが立っていた。

「北条豊です。よろしく。」

彼女は小声で、顔をうつむせながら言った。



五話：君＋僕（後書き）

なんかいきなりトントン拍子です。展開はやくて分かりにくいかも  
しませんね。

感想してくれると、嬉しいです。

## 六話：私＋彼

北条 豊

その後は解散した。 睡眠。

朝、私は目覚まし時計の設定時間の10分前に起きた。 今は6時30分。

いつもはこんな早く起きないけど、今日は早めに起きた。 理由は一つ。

約3年ぶりに、学校に行くことを決めたから。

親はいないから、朝ご飯は自分でつくる。 ご飯を食べ終わるともう時間は無い。

お昼ごはん代をお財布に入れて、いそいで家をでた。

「いつてきます。」

誰もいない家の、誰もいない玄関に3年ぶりにこの言葉を響かせた。 学校に向かう道には見たことのない人達がたくさんいた。 少しおどおどしながら私はかばんを肩にかけ歩いた。

皆、集団になつて登校している。 笑ったり、怒ったりしながら。

正直、羨ましかった。 後ろから、

「遅刻するうー！ー！！心次郎！いつてきまーす！！」

と、女の人の声が聞こえた。 高校生ぐらいかな。 私もあんな活発（？）な人になりたい。

少し後に、『内村』と書いた名札をつけた男子が歩いてきた。 一人で。

その時、何かに気付いた気がした。 昨日と同じ温もりが伝わってきた。

歩いていくと、コンビニがあった。 今日はこちらでパンでも買っていこう。

棚にはいっぱい、ビニール袋に入ったパンが並んでいた。

どれを買うか迷っていると、さっきの内村クンが入ってきた。隣には友達っぽい女の子がいた。

女の子が私の隣でパンを選んでいるのを見ていた。

やっぱり温もりを感じた。もしかしたら本当に昨日の……。なんて事あるわけが無い。

そんな事を考えていると、学校のチャイムがなった。

私は適当に選んだパンを急いで買って、学校に走った。

結局、遅刻はしたけど、別に怒られはしなかった。不登校女子が来たのにそんな事気にしてる場合な人なんていなかった。

ホームルームなる行事で紹介してくれるそうだ。

少しざわつく部屋に、私は勇気を振り絞って足を踏み込んだ。

「ガラガラ」

ドアの開く音と共に、すぐに気付いた。窓際のほうの、後ろの方の席。内村クンがいた。

またとどいた温もり。私は恥ずかしいから、うつむきかげんでしゃべった。

「北条豊です。よろしく。」

温もりの持ち主はそっと、私の方を向いた。

六話：私＋彼（後書き）

六話投稿です！！（チルチョコを食べながら）  
感想くれると嬉しいです！！

## 七話：話 君

「じゃあ、端っこの方の空いてる席あるでしょ？そこ座って。」

担任の一言に小さく頷き、そいつは俺の方に歩いてきた。空いてる席は、見事なことに俺の隣だけだ。

『まさか本当に昨日のあいつか？』

いつもならそんなこと考えたりするような事など無いのだが、俺が思うには間違いない。

北条は昨日のあいつだ。

ホームルームの後は休憩時間だ。北条にどうやって話しかけようか考えてると、北条が腕を少しだけ伸ばし、俺の制服をくいくいと引っ張ってきた。

「……昨日はありがとう。」

突然言われたもんだったからびっくりした。まさか北条から話しかけてくるとは思ってなかったし。

「えーっとなんて呼んだらいい？」

とりあえず話を変えようと思って言ってみた。

「……ユタカ。」

いきなり下の名で呼べと。でも俺はそれを受け入れた。

「じゃあさ、豊。昨日の約束、覚えてるよな？」

「うん」

「だったらこれで約束、守れそうだな。」

「……なんで？」

「そりゃあ同じクラスだったら、ほぼ毎日会えるんだから。一日ずつ、表情作っていいこう。」

無理なら一ヶ月でもいい。ぜってーに約束は守るからな。」

言った後に、こんな綺麗事信じてくれねえよなって思った。

でも豊は、少しだけ頬を赤らめながら、

「……ありがとう、心次郎くん。」

と言ってきた。いきなり下の名で呼ばれたもんだつたから、ちよつと照れくさくつて、目線をそらすように俺は窓の外に眼をやつた。またすぐに豊の方を見ると、まだ頬を少し赤らめながら、教科書やらを机の中から出している。

まったく変わらない表情<sup>かお</sup>だつたけど、俺には笑顔に見えた気がした。

## 七話：話 君（後書き）

久しぶりに投稿です!!

この小説イイ！ と思ってくださった読者様は、地球儀の端っこにパンチをしましょう。ぐるぐる回ります（当たり前田のクラッカ

！

## 八話：私 彼

「じゃあ、端つこの方の空いてる席あるでしょ？そこ座つて。」

先生の言葉に小さく頷いてから、私は空いている席の方へ向かった。隣の席は見事な事に内村クンだった。

何の根拠も無いけど、私は内村クンは昨日のあの人だ。と決め付けていた。

いや、絶対だ。

先生が少し話した後、ホームルームが終わり、休憩時間になった。内村クンがすぐに話しかけてくると思つて待つていたけど、ずっと考え込む様な表情で窓の方を見ていて、私はじれったくしてしやうがなかつた。

くいくい。と内村クンの制服を引っ張つた。それに気付いて内村クンが振り返つた。

「……………昨日はありがとう。」

あんまり何も考えずに振り向かせたから、一言しか言葉が出なかつた。

「えーっつと……なんて呼んだらいい？」

その場を濁すように聞いてきた。正直、こつちも少し助かつた。

「……………ユタカ。」

いきなり下の名前は嫌かなあとは少し思つたけど、内村クンは小さく頷いた。

「じゃあさ、豊。昨日の約束、覚えてるよな？」

「うん」

「だったらこれで約束、守れそうだな。」

「……………なんで？」

「そりゃあ同じクラスだったら、ほぼ毎日会えるんだから。一日ずつ、表情作つていこう。」

無理なら一ヶ月でもいい。ぜってーに約束は守るからな。」



そう言った後、少し恥ずかしそうにした内村クンの表情がかわいらしかった。

その言葉がすごく嬉しかった。

そういう自分も、すごく恥ずかしくって、頬が火照っていた。

「・・・ありがとう、心次郎くん。」

思わず下の名前で言ってしまった。照れくさそうに目線をそらした心次郎くんは、カッコよかった。

火照った顔が直らないけど、表情は変えられなかった。

でも、心二郎クンの心は、温もりを取り戻していたと思う。

## 八話：私 彼（後書き）

ロミオとジュリエットはオレンジ色の糸で結ばれています。  
こんにちは。神の息（溜め息）です。

読んでくれてありがとう。感想を頼むぜ・・・。

## 九話：君 僕

眠たい事この上ない授業が全て終わり、やっと開放された。

今は、春休みが明けてまだあまり経ってないので、一週間は昼までの授業だ。

「・・・今日は集会があるんだっ たっけな。」

思い出し、憂鬱になった。まあ、そうじゃなければパンなんか買う必要も無かったわけだが。

「先、行ってるわよ！絶対さばんじやないわよ！」

緋伊奈がたつたと走っていく。緋伊奈は学級委員なので忙しいのだからだるい俺は、教室の鍵を閉める仕事をもらい、最後まで教室に残ることにした。

少しすると皆、居なくなってた。が、隣にはまだ豊がいた。

「・・・行かなくていいの？」

「別にいいんだよ、こんぐらい。今日の集会は校長の一学期の注意と先生が帰った後にやる、ライブくらいのもんだからな。」

「・・・ライブ？」

「そ。ライブ。別にプロのミュージシャンが来るわけでもなく、普通に学生がやるだけのライブ。」

「・・・それって先生達は知ってるの？」

「多分。本当は止めなきゃいけないんだろうけど、なんせ人気あるからな。だいたい3グループぐらい出てくるんだけど、そんなにも凄い人気のあるグループがあつてな。バンドのグループなんだけど、名前は確か、「フナフティ」だったな。」

「どういう意味？」

「緋伊奈が地球儀回して見つけた地名だつてよ。」

「緋伊奈ちゃんもバンドやってるの？」

「うん。ギターやってる。あと、ヴォーカルもうちのクラスだったぜ。」

「・・・誰？」

「もとはら ふじお元原富士夫ってやつ。最近ではテレビの声優とかまでやってるらしいぜ。」

がた。と豊のイスから少しだけ音がして、いざ、立とうと言う様な体勢になって、無表情のままの顔を俺の方に向けてきた。　ワクワクしてるのか、すこし腕とかがムズムズ動いていた。

「・・・見に行くか。」

俺が一言言つと、少し大きめにコクリと頷いて、がたっと立ち上がった。

机の横に引つ掛けてあるカバンを持って、俺と豊は体育館に歩いていった。

「・・・やっぱパン食ってから行く？」

と俺が聞くと、今度は首を横に振った。　そのしぐさを見て、思わず笑顔がこぼれてしまった。　豊も笑った。　・・・ような気がした。ただだった。

九話：君 僕（後書き）

最近忙しくて死にそう・・・なんて弱気な発言はまったくしてませんよ！！本当ですよ！！うん・・・はい・・・忙しくて死にそうです。

こんな僕に感想を送ってくれと、僕の元気も100倍！！いや1000倍！！になりますので感想バンバン送ってください！！では、十話お楽しみに。

## 十話：問 彼

久しぶりの授業に少し疲れが溜まってしまった。今は正午。朝、先生に教えてもらったのだが、昼までの授業らしい。

「集会……。」

黒板を見ると端に書いてあった。どうすれば良いのか分からないまま、体育館に行く人達をボーッと見ていた。朝に見た女の子がたたーと走っていった。

皆、少し急いであるような様子なのに、心次郎くんだけずっと座っていた。

結局、二人だけになった。

「……行かなくていいの？」

どうしても気になった。

「別にいいんだよ、こんぐらい。今日の集会は校長の一学期の注意と先生が帰った後にやる、ライブくらいのもんだからな。」

「……ライブ？」

あまり中学校では聞かない話だ。

「そ。ライブ。別にプロのミュージシャンが来るわけでもなく、普通に学生がやるだけのライブ。」

「……それって先生達は知ってるの？」

「多分。本当は止めなきゃいけないだろうけど、なんせ人気あるからな。だいたい3グループぐらい出てくるんだけど、そんなにも凄い人気のあるグループがあつてな。バンドのグループなんだけど、名前は確か、「フナフティ」だったな。」

「どういう意味？」

「緋伊奈が地球儀回して見つけた地名だつてよ。」

「緋伊奈ちゃんもバンドやつてるの？」

「うん。ギターやつてる。あと、ヴォーカルもうちのクラスだったぜ。」

「・・・誰？」

「元原富士夫<sup>もとばら ふじお</sup>ってやつ。最近ではテレビの声優とかまでやってるらしいぜ。」

私はどうしてもライブが見たくなり、席から立ち上がりそうになった。

でも私は、素直に「行きたい」なんて言えるような人では無い。心次郎クンの方をじっと見て、「行こう」と言わんばかりの視線を送った。

「・・・見に行くか。」

私はすぐにコクリと頷いて、立ち上がった。

机の横に引っ掛けてあるカバンを持って、私と心次郎クンは体育館に歩いていった。

「・・・やっぱパン食ってから行く？」

少し意地悪な質問に、私は首を横に振った。すると心次郎くんはそれを見て、クスリと笑った。あったかい笑顔だった。

十話：問 彼（後書き）

やっと十話です！！ どうでもいい話ですが、読者数を確認した所、二話が一番多かったです。あと、話が進むにつれて、読者数が減っていったりしてる訳ですが、なぜか六話が人気高いです。どうやら豊の方が人気高いっぽい。それと、毎度毎度読んで下さってるかた方、本当にありがとうございます！！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7300d/>

---

表の裏に。

2011年1月25日14時25分発行